

～在留邦人の皆様へ～

(件名)

グルガオンにおける猿による被害と狂犬病予防に関する注意喚起

平成26年5月23日

在インド日本国大使館

1. 21～22日付けの報道によると、18日(日)、グルガオンのセクター23(グルガオン北部で IGI 空港南西の地域)の路上において、歩行中のインド人女性が4匹の猿に襲われ外傷を負いました。グルガオンでは、3週間前にもインド人医師が同様に猿に襲われる事件が起きています。

女性は狂犬病のワクチン接種を受けたことがなく、傷からは出血を認めたため、狂犬病発症を予防するために「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン(HRIG)」の注射を必要としました。グルガオンの複数の代表的な医療機関に問い合わせましたが「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン(HRIG)」の在庫がなく、最終的にデリーの公立病院(Safdarjung Hospital)でようやく注射を受けることができたことと記事で述べられています。

(注1) 「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン(HRIG)」は、ヒトの血液から作成した血液製剤です。狂犬病ワクチンによる免疫がない人が、狂犬病を否定できない犬や猿に血が出るほど咬まれた際、創部の周囲等に注射して狂犬病発症を防ぐ目的で使用します。「狂犬病ワクチン」とは別の医薬品です。今回、グルガオンの医療機関で不足が報じられたのは、「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン(HRIG)」で、「狂犬病ワクチン」ではありません。

(注2) 最近、市街地や観光地において野生の猿が人を襲うケースが増加しており、注意が必要です。

2. 狂犬病とは

狂犬病は、狂犬病ウイルスに感染し狂犬病を発症した哺乳動物(犬、猿、コウモリ、アライグマ、マンガース、キツネなど)に咬まれたり、傷口や目や口の粘膜を舐められたりすることにより人に感染します。10日から数年(多くは2、3か月)の潜伏期間の後、発熱、頭痛、全身倦怠感などで発症し、やがて、筋肉のけいれんや幻覚、飲み込みづらさなどの症状が現れます。患者はやがて昏睡に陥り、100%死に至ります。

世界保健機関（WHO）によれば、インドは、狂犬病の報告数が世界で最も多い国であるとされています。

3. 狂犬病の予防

（1）動物との接触を避ける

狂犬病の予防の基本は、何といても狂犬病を否定できない哺乳類との接触を避けることです。インドの場合、狂犬病報告例の加害動物のほとんどが犬で、次いで猿が多いと言われています。一般的に、市内の路上や市場、観光名所でおとなしく寝ているような犬は、ほとんどが狂犬病の危険がないと考えられます。狂犬病を発症した犬は、文字どおり「狂犬」となって異常な行動をとることが多く、典型的には、行動に落ち着きがなく、よだれをたらして唸り、ほかの動物に対して攻撃的になったりします。しかし、出会った犬や猿が狂犬病かどうかをその場で確実に知ることはできませんので、これらの動物は「狂犬病かもしれない」と考えて、可能な限り距離を取って、これらの興味を引かないよう行動することが大切です。

一方、リスなどのげっ歯目は、哺乳類でも狂犬病伝搬のリスクが低いとされています。

（2）予防接種（曝露前免疫）

狂犬病の予防には事前のワクチン接種が有効です。狂犬病の予防のため、犬や猿に咬まれたりする前に狂犬病ワクチンを接種して狂犬病に対する免疫をつけておくことを、「曝露前免疫」と呼びます。日本では国産の狂犬病ワクチンを用いて3回皮下注射（4週間間隔で2回、6～12ヶ月後に1回）します。国産ワクチンによる曝露前免疫の効果は、半年から1年半とされています。

一方、海外（欧米やインドを含むほとんどの国々）では、海外製狂犬病ワクチンを3回筋肉注射（1回目の接種を行った後、2回目は7日後、3回目は21日後か28日後）します。米国疾病予防センター（CDC）は、獣医など特殊な場合を除いて3回の曝露前免疫を済ませれば、その後何年たっても追加接種は必要ないとしています。一方、ワクチンメーカーは1年後とそれ以降5年ごとの追加接種を勧めています。

（3）犬や猿に咬まれてしまったら

まず、咬まれた創部を石鹼ときれいな水でよく洗った後、消毒してください。決して傷口を舐めたり、吸い出そうとしないでください。消毒後は、ただちに医療機関を受診して医師の指示に従ってください。

曝露前免疫を受けている場合、咬まれたら2回（1回目の接種を行った後、2回目は3日後）のワクチン接種（曝露後免疫）の追加が必要ですが、「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン（HRIG）」は必要ありません。

曝露前免疫を受けていないか効果が切れている場合には、狂犬病ワクチンを4回ないしは5回接種します。1. (注1)で述べたように、血が出るほど咬まれるか引っかかれていれば、最初のワクチン接種時に創部の周囲などに「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン (HRIG)」を局所注射するよう WHO が推奨しています。

(注3) 咬んだのが狂犬病を発症した犬であれば、その犬は10日以内に死亡するはずで、飼犬であれば檻など安全な場所に10日間隔離観察し、この犬が死ななければ咬んだ犬は狂犬病でなかったと証明できます。この場合、それ以降予定されている狂犬病ワクチンの接種(4回目以降)は中止してかまいません。

(注4) 日本では狂犬病が撲滅されているため、医療機関に「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン (HRIG)」がありません。インドで狂犬病かもしれない哺乳動物に咬まれ、「日本の方が安心だから」と慌てて帰国して治療を受けようとしても、日本では「ヒト抗狂犬病免疫グロブリン (HRIG)」が手に入らず困ってしまうことにもなりますのでご注意ください。

(参考情報)

- ・ 外務省海外安全ホームページ 狂犬病～もし咬まれたらすぐに医療機関へ

<http://www2.anzen.mofa.go.jp/info/pcwideareaspecificinfo.asp?infocode=2012C236>

- ・ 厚生労働省 感染症・予防接種情報 狂犬病

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou10/>

- ・ 厚生労働省検疫所 FORTH 海外で健康に暮らすために 狂犬病

<http://www.forth.go.jp/useful/infectious/name/name47.html>

- ・ 国立感染症研究所 感染症の話 狂犬病

http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k03/k03_18/k03_18.html

- ・ WHO (世界保健機関) Health Topics Rabies (英文)

<http://www.who.int/topics/rabies/en/>

- ・ CDC (米国疾病予防センター) 「 Diseases and Conditions Rabies (英文)

<http://www.cdc.gov/rabies/>

(参考文献)

- ・ CDC HEALTH INFORMATION FOR INTERNATIONAL TRAVEL 2014 (CDC)
- ・ 海外渡航者のためにワクチンガイドライン (日本渡航医学会)
- ・ 予防接種に関する Q&A (一般社団法人日本ワクチン産業協会)